
日本国民参加型ゲーム

two

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本国民参加型ゲーム

【NZコード】

NZ0983N

【作者名】

two

【あらすじ】

平和な日本で突然始まった殺人ゲーム！！

ゲームクリアの条件は・・・

何人生き残れるのか？

それともゲームオーバーとなってしまうのか・・・

4月1日 カズヤ宅

10:00

けたたましいアラーム音が家中に鳴り響く。

こんな早い時間でだるいが早く起きて準備をしなければ。
今日は絶対に遅れることはできない。

大学は春休み中なので、いつもは毎週ぎまで寝ている。

そんなおれだが、今日は早起きだ。

2

ゴイとのトークの約束があるからだ！

…まあ、まだ付き合つちゃいないが…今後付き合えればいいな…
と。

おれはカズヤ。

大学3年生になつたばかりの20歳。
趣味は野球。

野球サークルに所属。

バイトして遊んでの、典型的な大学生活を送っている。

今日のデート？のお相手はユイ。

大学2年生。
サークルの後輩。

綺麗な黒髪が印象的だが、おっしゃる通りで守ってやりたくなる
よつな可愛い子だ。

…12時に渋谷かあ、がんばるぞ！

4月1日 渋谷ハチ公前

12：03

やばい、まさかの遅刻…、せりぎつ間に合ひつと思つたが微妙に間に合
わない…

せっかく早く起きたのに何やつてんだおれは…

まだ電車の時間まで余裕があると思つてコンビニに立ち寄つたのが
いけなかつた…

まだ読んでない週刊誌が田口つき、ついつい立ち読みし始めたら、
電車に乗り遅れてしまつた…

前の彼女と別れた原因がこれだ…

…全然おれ成長してないよ…

「「めん、「」めん。ちょっとバス遅れてて、一本電車乗り遅れたち
やつたよ」

…じょうもない嘘をつくところも全く直らないか…

「だいじょぶですよ。今日映画ですよね？私、久しぶりの映画です

「ここ楽しみにしてたんですよ」

屈託のない笑顔があれの心拍数を押し上げる。

：がんばるぞ！

4月1日 渋谷某スポーツバー

19：10

映画を見て、しばらくぶらぶらした後、おれはコイとスポーツバーへ向かった。

おれとコイの共通点は野球好きとこいつ」と。

プロ野球が開幕し、一緒に野球を見れると思いつい、こいつを選んだ。

「あのシーンよかつたよね。思わず涙腺ゆるんだよね」

「そうですね！予告見た時からどうなるか楽しみだったんですけどまさかの展開で最後はすごい感動的でしたよ

今日見た映画は、コイが前から見たいと言っていた恋愛物だった。

正直、おれはアクションのほうが好きだ。

ユイを落とすためにおれは好みでもない映画を見て、柄にもないことをしゃべっている。

(さて、これからどうするか…サプライズを準備しているがどのタイミングかが大事だぞ)

ガガツ、ガガガー、ガガー

急に店内の野球中継をしていた巨大スクリーンの画像が乱れた。

そして、途切れた。

ザ―――

ザ―――

画面は砂嵐になってしまった。

カタ、カタカタ、カタカタ、カタタタタタタタタタタ…

砂嵐の上に何か赤い文字が浮かび上がる。

『日本国民参加型ゲーム』

「日本国民参加型ゲーム?なんだこれ?」

店内の客はみんなおれと同じリアクションだ。

店のなんかのイベントか?とも思つたが、従業員の一人はリモコンのボタンをあちこち押しており、

もう一人の従業員は配線の確認をしているのを見ると店のイベントでもないことがわかつた。

「おーい、ここも同じの出でるぞ!」

客の一人が自分の携帯を見せながら叫んだ。

おれも急いでジーンズの左ポケットから携帯を取り出す。

よほど慌てていたのか、携帯がうまく手に收まりず、携帯を落としてしまった。

床に落ちた携帯。

その画面にも……やはり……

『日本国民参加ゲーム』

砂嵐を背景に赤い字。

ゴイの携帯にも同じものが……

「キヤーーー、何これ？なんのこれ？気持ちわるい…」

見れば見るほど薄意味悪い映像だ。

砂嵐をバックによく日本のホラー映画で使われるような字体。

赤い文字からは少し血が流れているかのように見える。

その文字、言葉が砂嵐の中、震えるように小刻みに動く…

微かに消えてはまた網膜に焼き付けんとばかりに濃く浮かび上がる…

そこへ少し前に会計を済ませた常連客の一人が、ドアを叩き破る勢いで戻ってきた。

「外が大変なことになつてゐるぞー！」

このバーは地下にあるので周りの状況はよくわからなかつた。

おれは席を立ち上がり地上めがけて階段を駆け上がつた。

地上に出たおれを待っていたのは、

- 『日本国民参加型ゲーム』
- 『日本国民参加型ゲーム』
- 『日本国民参加型ゲーム』
- 『日本国民参加型ゲーム』

……

正面のビルの巨大スクリーン、

店頭に面したハイビジョンテレビ、

道行く人々の携帯、カーナビ……

恐ろしいあの映像が辺り一面を覆い、ネオンが輝く街を不気味な雰囲気に変えている。

ジー、ジジッ、ジジッ…

雑音と共に『日本国民参加型ゲーム』の字が消えて行く…

カタ、カタカタ、カタカタ、カタ

代わりに出てきた文字は、

『一億三千万分の一が犯人』

それと…画面の右上には小さく…

『130,000,000 / 130,000,000』

…と

ただ…、これは…、ゲーム…、です…

僕も…、何も…、しないで…、殺されるのを…、待つわけでは…、
ありません…

僕は…、あなたたち…、日本国民…、全員を…、殺します…

あなたたちが…、僕を…、殺すのが…、早いか…、僕が…、日本国民を…、全滅…、させるのが…、早いか…

ちなみに…、現状を…、見ても…、わかるよひに…、僕は…、すでに…、日本の…、全ての…、電波を…、支配…、しています…

衛星も…、ジャック…、しました…

画面の…、右上を…、見て…、下を…

今…、

『一億…、三千万…、分の…、一億…、三千万…』

に…、なつて…、います…

僕が…、一人…、殺して…、いく度に…、分子が…、一ずつ…、減つて…、いきます…

『一億…、三千万…、分の…、一…』

に…、なるまでに…、僕を…、殺すことが…、日本国民の…、皆さんの…、ゲームクリアの…、条件…、です…

逆に…、それまでに…、僕を…、殺せなければ…、ゲームオーバー…、です…

僕も…、日本国民…、です…

最後の…、『一』…、は…、僕が…、生きている…、ことを…、表します…

生死の…、カウントは…、衛星に…、植え付けた…、生存者…、管理…、システムにて…、行います…

僕が…、死ねば…、この…、システムは…、停止…、します…

手始めに…、皆さんが…、油断…、している…、うちに…、稼がせて…、もういます…

映画が…、始まつて…、5分以内で…、死んでしまう…、最も…、ザ「ギャラ」…、さんたちは…、あなたたち…、ですよ…

…では…」

ドグオーネー
ンゴーネーン

「キヤー、キヤー」

渋谷のあちこちで爆発が起き、爆発音と悲鳴が入り乱れる。

おれの目の前でも爆発が起きる。

閃光に目がくらむ。

手が触れるときメメメとまるこの感触、何かの生きしい塊、

目が開かなくとも自分の肌を通して伝わる現実、…

…逃げる…逃げる…

…ビリヒ…ビリヒ…

爆発は至る所で続いている。

…とにかく落ち着け、落ち着け、現状を把握しないと…

なんでおこるのか?…

何でここまで来たのか？

誰とここに来たのか？

…落ち着け、落ち着け…

ギュッと誰かがおれの手を握った。

「助けて！！」

おれは我に返つた。

「ユイー。」

そうだ、おれはユイと渋谷に来ていたんだ。

今、おれのやることはユイを連れてこの地獄から逃げることだ。

「ユイ、逃げるぞーとにかく走るんだ。あと絶対におれの手を離すなー。」

爆発は収まる気配はない。

遠くの方からは火柱があがり、辺りは黒い煙が立ち込めている。

人間は将棋倒しになり、人が人の上を逃げている。

足元は血の海となり、人間だったものが辺り一面、折り重なるように散らばっている。

「コイ、田を開けんなよー。」

おれはコイを守るーその一心だけで、無我夢中で逃げた。」

4月1日 渋谷隣接郊外

21:35

どれだけ走り続けたか…

渋谷からはだいぶ離れたようだ。

周りには同じように逃げて来た人達が疲れ果てて座り込んでいる。

ユイを見ると、ユイもこれ以上走るのは限界のよう見えた。

「ソルまで来ればだいじょぶだろ? からひよつと休もうか」

ユイは黙つて頷いた。

渋谷の方角を見ると夜の空が赤くぼやけて見える。

もつ爆発音は聴こえない。

代わりに救急車のサイレンの音が微妙に聞こえてくる。

「オニツ

少し前まで、あの悪夢のような場所いたと思つたがしてまた。

コイを見ると、ずっと黙ったまま、しゃがみ込み下を向いたままだ。

あれほど惨状…

人間はあんなにも簡単にバラバラになつてしまつのか…

人間からはあんなに多くの血が流れるのか…

人間の悲鳴とうめき声が頭の中で繰り返し繰り返し再生される。

きっとユイもそんな状況なのだろう。

こんな中、意外におれは平常心を保てた。

目の前で起きたことを思い出すと気持ち悪くなるが、自然と頭は冷
静だった。

この方向に逃げてきたのもただやみくもに逃げてきたのではなく、

暗い方、静かな方を選びながら走ってきた。

携帯を開くと好きなグラビアアイドルが水着姿で微笑んでいる。

画面は通常に戻っていた。

ただ画面の右上には、

『129-261-550/130-000-000
129-261-549-129-261-548-129-
61-547-』

これだけはいつもおれの携帯とは違つた

『ウッド・ベル』

そいつの話が本当なら…」それだけのことがあったのだから、本當なのか?

この画面の右上の数字が表しているものは、あの惨劇で死んだ人の数を表しているのだろうか?

すでに80万人…?

「ほら、渋谷も大変なことになってるみたいだよ」

「あら、ほんと大変ねえ。この辺りにいる人達は渋谷から逃げてきたのかしら」

近所の人々がベランダから渋谷方面を見ながら話をしている。

渋谷があんなことになつてているのに、日本人は自分のことでないと完全に他人事だ。

ただ、“渋谷も”という近所の人の言葉が気になつた。

「すいません、今“渋谷も”と言つてましたが、他にも何かあつたんですか？」

「そうよ、今いろんなところで大変みたいよ。テレビは今みんな“同時多発テロか？”って騒いでて。

渋谷以外でも、札幌や仙台、新潟、長野、名古屋、大阪、広島、那覇と各地でテロが起きてるのよ。

『ウッド・ベル』とか名乗ってるやつが犯人らしいけど…」

ブツーー、ブツーー

急に携帯が震えた。

「あつ、またテレビ砂嵐になつたわよ。また『ウッド・ベル』出でくるみたいよ」

いろいろ教えてくれた人は、そう言ってベランダから家の中に戻つて行つた。

おれは恐る恐る携帯を開いた。

また砂嵐だ。.

そこに徐々に大きく映し出された。.

『129 - 081 - 115 / 130 - 000 - 000 - 000』

文字が浮き上ると、またあのくりウムを吸つたよつながらだけた声が聞こえてきた。

「監さん、いかが、でしたら、しょうか。

最初に、100万、ポイント、へりこはと、思こ、ましたが、予定より、やや、シート、しました。

今現在、918-8856の、死亡が、確認、されました。

「冥福を、お祈り、します」

「チーン」

「初めての、ゲーム、どこいとど、監さん、お疲れ、かと、思います。

今日、この後、だけは、何も、しない、ことを、お約束、しますので、

「今日は……、ゆづくつと……、お休み……、下せこ……」

「ふざけんなよーなんだよこれーゲームってなんだよー。こいつは死
にせりになつたんだよーくそつー」

「……ねえ、……カズヤ先輩、……家に……帰りたい……」

ユイがやつとの声でボソッとつぶやいた。

辺りをみると、逃げてきた人達は、まだ座り込んでいる者もいるが、それぞれ重い足どりで歩き始めている。

まだ混乱している者、現実を受け入れた者…

「そうだねユイ、早く家に帰るわ。ちゃんと送つていくからね」

幸いなことに電車は止まっていたが、渋谷とは関係のない路線のバスは動いていた。

バスは非日常だったおれとユイを日常のように運んでいった。

「一人でだいじょぶ? 今日一緒にいよっか?」

こんな時だ、別にやらしい気持ちで言ったのではない。

ユイもおれも一人暮らしで、ユイを一人にするのは心配だった。

「…だいじょぶです。今日は本当にありがとうございました」

「ほんとにだいじょぶ? 何かあつたらすぐ電話してね。すぐ駆け付けるから」

おれ自身一人になるのがちょっと怖い部分があった。

ユイにおやすみを言うとおれも一人暮らしをしているアパートへ帰った。

4月1日 カズヤ宅

23・36

部屋へ入るなり、張り詰めていた緊張の糸が切れた。

こひまつもおれが普通に過ごしている部屋だ。

漫画は読みっぱなし、服は脱ぎっぱなし…

おれは朝起きたままの布団がめぐれっぱなしのベッドに倒れ込んだ。

…疲れた…

ふと携帯を見ると、着信あり、受信メールありになっている。

ユイからか？

『カズヤ大丈夫？渋谷から少し離れてるから大丈夫だと思つけど、無事ならいつたん連絡ちょうどだいね 母』

おれは、

『大丈夫だよ

とだけ打ち込み、送信した。

ユイに電話しようかどうか迷つたが、今日は大変だつたね、といった簡単な内容とおやすみ、だけを入力しメールだけで済ませた。

長い4月1日が田を閉じることで終わる。

ただ、田を開じてじっと明日にな。

明日以降は何が起きるのか？

次の日起きたら夢だつたらいいなと思いつつおれは田を閉じた。

4月2日 高知県 ヒテ宅

10：55

朝からテレビでは、昨日起きた国内9ヶ所同時多発テロの話題しかやつてない。

まあ、当たり前といえば当たり前だ。

幸いといつていいのか、四国ではどこも被害を受けていないが、テレビを見る限り各地かなり悲惨な状況になっている。

2001年のアメリカの同時多発テロの時は、外国と云ふこともあり危機感は全然わかなかつた。

自分が住んでいる国で起きたら、頭がおかしくなるだらうと思つていた。

しかし今回、日本でテロが起きたが、自分がその現場に居合わせていなければ、危機感は全くわいてこない。

むしろ、どんな感じか生で見てみたいという好奇心がわいてきた。

…人間つてこんなもんだよな…
とため息をついた。

テレビ画面の右上には相変わらず例の数字がカウントされている。

『128・355・680／130・000・000』

昨夜よりも70万人も減っている。

カウンターは今もなお動き続けている。

この一晩でこれだけ多くの人が苦しみ亡くなつていつたということ
だ。

そして、今この瞬間にでもどこかで誰かが亡くなつているところと
だ。

とにかく自分でなくてよかつたと思いつつ、大学のサークルへと向
かつた。

4月4日 四国全土

4 : 4 4

いつせいに画面が消え、砂嵐になつた。

カタカタ、カタツ、カタカタ

画面に文字が打ち込まれていく音だけがまだ夜明け前の静寂さの中に響く。

『シコクザイジュウノミナサン、

オハヨウゴザイマス。

イマカラ、

シンデクダサイ。

ドクガスヲマキマス。

タスカルホウホウハ、アリマス。

ニゲルコトガ、

スベテデハアリマセン。

マズハミナサン、

ゲームニサンカデキルコトヲイノツテイマス。

…デハ…』

カタツ、カタカタ、カタ

『シコクヘン』

カタ

『四國編』

4月4日 高知県 ヒテ宅

5：15

なんだか外が騒がしい。

昨日も大学のサークルの飲みで、帰つて来たのは3時過ぎだつた。

これじゃ、眠くても眠れない…。

あまりにも騒々しいので、ヨタヨタしながら部屋のカーテンを開けてみた。

視界に飛び込んできたのは慌てふためく人、人、人…。

車は猛スピードで、人混みの中を走り抜けていく。

「ん? なんだ?」

あまりにも異常な雰囲気だったので、急いでサンダルだけ履いて外に出てみた。

・
・
・
・

「すいません、毒ガスってなんのことですか？」

「あー、もう時間ないんだよー携帯見てみろよーいいから手、離せー！」

……携帯？

男はおれが一瞬手の力を緩めたのを見逃さずに手を振りほどいて逃げて行つた。

おれは急いでポケットから携帯を出して開いてみた。

……
……

昨日まで平穏な生活を送ってきた。

3日前のテロをニュースで知った時も楽観的にしか考えていなかつた。

理解するのに数秒かかった

…やばい

初めて危機感が込み上げてきた

おれはまーす一一番仲のいいアキオに電話をした。

アキオはまだ寝ていたが、今の状況を説明すると電話口でもアキオの酔いがさめしていくのがわかつた。

「ヒート、これからビーツあるよ。」

「ビーツあるって言われても、3日前のこともあるから逃げなことやばいだろ。」

逃げてる人の話だと、四国から出ればだいじょぶって話だから。アキオ、おまえ車出してくれ!」

「車か…わかった。すぐ準備してヒートんとこ迎え行くよ。」

「あと、アキオの車5人乗りだよな?ハセガワとイワキ、マツナミに連絡しとくから3人も頼む!」

「了解、みんな近くだから15分でみんな拾つてくよ。」

20分後、予定より5分遅れてアキオの車がアパートの前に止まつた。

ハセガワ、イワキ、マツナガももう車に乗つてゐる。

アキオはある程度荷物を準備していたようだが、他の3人は着の身着のまま出でたようだ。

おれも荷物という荷物はないが、携帯、充電器、現金、免許、簡単な筆記用具は持つた。

あとは小さい頃から肌身離さず持ち歩つてゐるお守りくらいだ。

「ヒテ、急げ！もう道かなり混んでるぞ！」

おれが車に乗ると車はすぐに発進した。

「道だいぶ混んでるよ。『毒ガス予告』から30分くらいしか経つてないのにやつぱりみんな混乱してるよ」

「くそー歩道通れよ！避けてくれのめんどくせえな！」

「つてか、信号意味ないね。人も車もチャリもみんな信号無視だよ。車線も関係ない感じだね」

「じょうがないでしょ。みんな自分が逃げるのに必死なんだよ」

「まあ、おれらもそのうちの一人だからね…」

車の外を見ると、30分前の比ではない。

なかなか車もスピードが出せない。

人混みを掻き分けてやつとのことで交差点を曲がる。

ふと、急いで駅に向かっている人の中に知つた顔が見えた。

同じサークルのタカハシだ。

普段から妙なテンションで無駄に絡んでくる奴で、正直嫌いな奴だ。

おれは一瞬目が合つたが、気付かない振りをした。

しかし、向こうは気付いていた。

人の間をぬつて、おれらの車によつてきた。

アノン、アノン、アノン

「おい、おれも乗せやうよー。ドア開けろよー。おまえらだけ車で逃げん

のはずりいぞー早く開けろよーおーっー

勢いでマジナミがドアを開けようとした。

「マジナミ開けるなー。」

アキオが叫んだ。

「この車は5人乗りなんだ。あいつは乗せられない」

「えつ？でも…」

「ただでさえ5人乗ると狭いんだ。あいつが乗るスペースはないよ。

あとおれタカハシ嫌いだし。

あいついつもおれらの悪口隠れて言いまくってんだよー。マジナミも知つてんだろう？」

「それはそうだけど…」

確かにアキオが言つとおりだ。

タカハシはいつも仲のいいおれら5人組の悪口を他の人に言いまくっている。

それだけじゃない。

あいつに何か頼み事をしても一度も聞いてもらつたことはない。

タカハシはそんなやつだ。

「席が開いてるならまだしも、満席の状態でタカハシを乗せるのはおれも反対だよ」

おれはアキオの意見に同調した。

アキオとおれが反対したことで、タカハシは車に乗せない、ということになつた。

マツナミもハセガワもイワキもタカハシを普段からよく思つてなかつたせいか納得したようだ。

アキオはタカハシを無視して、アクセルを踏んだ。

「おいつ、待てよー待てつて！止まれよ！」

タカハシは車の窓を必死で叩きながら追いかけてくる。

「アキオもつとはやくー！」

「速くって言われても、人が邪魔でなかなかスピード出せないよー！」

車はタカハシをなかなか振り切れない。

それどころかスピードが落ちるとドアの取っ手をつかみガチャガチャやつてくる。

100メートル程そんなことを繰り返していたが、ドンッという音とともにタカハシの姿が見えなくなつた。

すると、急にフロントガラスの方からタカハシの逆さまの頭が覗いた。

タカハシは逆さまの状態で顔をフロントガラスに押し付け、フロントガラスを叩きだした。

「わっ、なんだこいつー。やばこどうしよー。」

と言しながらアキオはハンドルを左右に切る。

タカハシも鬼のよつな形相で、車から振り落とされないよつにじがみついている。

しかし、車が一瞬ブレーキをかけた瞬間、タカハシはおれたちから離れて行き、穴に吸い込まれるかのようにあつという間に視界から消えた…

デンシ、デゴン、ズン、ゴンシ

シートベルトをしていたおれの身体が2回激しく上下した…

おれは…おれたちは何が起きたのか、みんなわかつていた。

ただ、自分たちがしてしまったことで身体が固まってしまった。

アキオはハンドルを両手でしっかりと握ったまま、目を見開き前を凝視している。

おれは固まつた身体の中で唯一動いた眼球を使って、ゆっくりとサイドミラーを見た…

仰向けてヒクヒク動いているように見える人間がミラーに映った。

その人間が微かに頭を動かすとサイドミラーレンジに目が合つたような気がした。

と次の瞬間、後続の車がその人間を飲み込んでいった…

アキオは黙つたまま前だけを向き運転を続いている。

後部座席の3人も無言のままだ。

おれも何も話せない…

最後に見たミラー越しのタカハシのあの目が頭に焼き付いたまま離れない。

「なあ、悪くないよな…、…おれが悪いわけじゃないよな…」

アキオがたまらず口を開いた。

「だつて、もう定員いっぱいだから乗れないよな?

それなのにあいつが車叩いたり、車の上によじ登つたり… 実際あの時、もうあいつが邪魔で前も見えなくて…」

アキオは自分のことを正当化するかのように卑口でまくし立てる。

おれも重い口を開いた。

タカハシがこうなったのはおれがアキオの意見に同調したからであり、おれにも責任がある。

「……」自己を正当化しておかないと持たないと思つた。

「やうだよー乗れないもんは乗れないんだから、それを無理矢理乗らうとしてくるあいつが悪いんだよ！」

あいつが諦めていればこんなことなんなかつたんだろう？ あいつのせいだよ！

そつこいつも頭の中では、サイド//ドアに映つたあのシーンが何度も何度も繰り返されている。

「とにかく今は逃げないと……」

6・15

朝起きてから1時間。

もう昨日までは遅い。

『ウッド・ベル』の四国毒ガス予告だけでおれの日常が日常でなくなってしまった。

現におれが乗った車で人をひいてくる。

この混乱した中で、そのことを理解してしまつ自分がいる。

ただ、それよりも今は一刻も早く四国から逃げなくてはならない。

四国を車で出るには、3つのルートしかない。

一つは、今治から大島、伯方島などいくつかの島を通り広島に渡るルート。

2つ目は、坂出から瀬戸大橋を通り岡山に渡るルート。

3つ目は、鳴門から淡路島を通り兵庫に渡るルート。

他にフェリーなんかもあるがまず乗れないだろう。

今、高知にいるのでもまずは高知道を北上する。

問題は高知道の川之江にてだ。

川之江にてがこの3つのルートのどいを選ぶかの分岐点となる。

10:03

「ハル、どうする? もひひ三井戸だよ。さつひに行へ?」

アキオが久々に口を開いた。

こっちを向いた田は徹夜明けのように疲れ切っていた。

「そうだな、正攻法で最短距離を行くか、裏をかいて遠いほうで行くか…

あと、アキオ、運転代わるから、しばらく後ろで休んでたらいいよ

渋滞の中、じて直前で車を側道に止めアキオと運転を代わった。

おれは運転を代わると同時に他の車がどこに向かうのかを注意深く観察した。

ここがポイント、ここを外すか当てるかで運命が変わる。

普段、遊び人の大学生だが妙に頭が働く気がした。

「鳴門で行こう」

渋滞の列に戻るとおれはなんの迷いもなくみんなに行き先を伝えた。

「…鳴門つて一番遠いんじや…」

みんなからそんな声も上がったが、

「だいじょぶ、鳴門でだいじょぶだから」

「こうあれのなぜだか説得力のある言葉で一番距離のある鳴門に向かう」とになつた。

19：16

もうかれこれ半日以上たつ。

中身の全くない、異様に長く感じる時間だけが無駄に過ぎていく。

車のステレオから流れる『ユースは『ウッド・ベル』のことだけで
もつ耳をふさぎたくなる状況だ。

さすがにうんざつしてスイッチを切ろうとした瞬間、カーナビの画面
が赤く染まり、そこから血みどりになつた文字が浮かび上がつて
きた。

『四時間四十四分』

「4時間44分？4時間44分…なんだこれ？」

血が滴り落ちる文字が頭に焼き付く。

時間が経つにつれなぜだか冴えてくるおれの脳みそが時計に目を向けさせた。

「…残り時間か」

日付が変わるまでの時間…

日付が変わると何が起きるのか？

毒ガスがまかれるのか？

しばらくするとカーナビにまた別の数字が浮かび上がってきた。

『候補者2556285名』

「…でもおれの脳みそは瞬時に候補者の意味を理解した。

「…四国内に残ってる人数か。候補者…」

候補者という言葉が何かひつかかる。

なんの候補者なのか。

ただ、今は言葉の意味を直感で捕らえられるほど感覚が研ぎ澄まされていった。

『四十四分四十四秒』

カーナビの数字がゆっくりと血が流れるよつに書き換えられた。

よく『四』は『死』だから縁起が悪い数字だとされてきた。

たしかにこの状況でこれだけの四を並べられるとそれを実感するの
は容易だ。

『候補者2139952名』

カーナビに浮き上がる数字と候補者という言葉の意味を考えている
間に、鳴門大橋まであと数キロの所まで来ていた。

「鳴門大橋だ、もうちょっと、もうちょっとで鳴門大橋だよ。間に
合つ、間に合つよー。」

アキオが視界に飛び込んできた鳴門大橋を見て叫んだ。

ハセガワ、イワキ、マツナミの後部座席の三人も前に体を乗り出し、アキオを急かしている。

アキオと交互に運転をしてきたおれだが、一二二、三時間は助手席でずっと頭をフル稼動させていた。

「候補者……タスカルホウホウ……」

ウッド・ベルの言葉が気になる。

『タスカルホウホウハ、アリマス。

ニゲルコトガ、

スベテデハアリマセン。

マズハミナサン、

ゲームニサンカデキルコトライノツティマス』

たしかこう言つていたはずだ。

逃げることが、全てではない…

ゲーム

候補者

23・25

「くそつー。せつきから全然進まねえよ」

考え込んでいたおれは、アキオの苛立った声で我に返った。

ふと外を見ると鳴門大橋は10分前とほとんど同じ位置に見えた。

「10分でほとんど進んでいなーようだ。」

外を歩いている人にどんどん抜かされて行く。

「ねえ、これ進まないのって前方の人達が車乗り捨ててるからじゃない?」

マツナミの言葉通り、車を降りてみると前も後ろも至る所で車から人が出てきていた。

「ちくしょう! 車捨てろってことか! ? くそつー! 」

アキオが悔しがるのもよくわかる。

この車はアキオがずっと欲しがっていた車で先日やっと手に入れたものだつた。

しかし、状況が状況なのでアキオもすぐに觀念した。

おれらは車をその場に乗り捨て、鳴門大橋へと向かう列に合流した。

車を捨て、うなだれているアキオにマツナミが付き添つて歩く。

そんな姿を視界の隅に置きながら、おれは頭の中で反復していた。

…逃げることが全てではない…

…ゲームに参加できることを祈っている…

「よかつた、間に合つた、鳴門大橋に着いたよ。早く渡りついー。」

イワキの声が聞こえ、おれはふと時計を見た。

「…23時35分かあ」

『四分四十四秒』

『候補者2067055名』

そろそろと思い、携帯を開くと画面にはそう表示されていた。

「おー、ヒート。ホントにおまえを信じていいんだろうな？もし違つてたらおれら…」

目の前を大慌てで通り過ぎ、橋を渡つて行く人達を見つめながらアキオが聞いてきた。

23時35分に鳴門大橋に着いたおれらは、人の波に流されるように橋へと足を踏み入れよつとしていた。

アキオもハセガワもイワキもマツナミも安堵の表情を浮かべていた。

同じように必死で逃げてきた周囲の人達の顔も心なしか明るく見える。

「アキオ、ハセガワ、イワキ、マツナミ。おれを信じてくれるか?」

押し寄せる人の流れの中、おれは4人を呼び止めた。

おれの頭の中は鳴門の大渦のようにウツド・ベルの言葉が渦巻いていた。

この昨日までとは違う世界に危機感を感じながらも同時に好奇心もわいてきている。

頭は幸いにもかつてないほど冴えている。

「逃げないほうに賭けてみないか?」

おれは冷静な口調で言つたが、家から逃げる時に持ち出したお守りをポケットの中できゅっと握りしめていた。

結局、おれの予想外の問い合わせ入れてくれたのはアキオとマツナ

ハセガワとイワキは猛反対し、橋を渡るほうを選んだ。

「大丈夫…、大丈夫だ。…おそらくこっちが正解なはず」

「ああ、何が起きるんだ…」

最後の力を振り絞つて橋に押し寄せる人。

もう〇時には間に合わないであろう橋から離れた所からは罵声、最後の叫びが聞こえる。

「だいじょぶ…だいじょぶだ…」

携帯の時計はデジタル式の為、23時59分の何秒まで進んでいるかはわからない。

変わら、変わると思いながらも表示されている数字は59分のままだ。

59、59、59、59、00

「あつ…」

プシュー

プシュー

橋の上に煙が立ち込める。

一気に橋方面の視界が悪くなる。

煙に覆われていく中、人が倒れていくのが見えた。

正確にいうと人混みでそれぞれ身動きが取れないため、真下に崩れ落ちていく感じだった。

『ゲームサンクニンズウ、

ヒヤクキュウジュウゴマンヒヤクジュウハチメイ。

マズハ、オメデトウ。

サッソクデスガ、

ゲームセツメイデス。

イマカラ、

ヨンジュウヨンニチ、ヨンジュウヨンパン、ヨンジュウヨンビュウ
デ、

シコク、ハチジュウハッカショ、

ギャクマワリ、シテクダサイ。

ジカンセイゲンガ、

アリマスノデ、

イソイデクダサイ。

…デハ…』

4月5日

0・15

「橋にいた人はみんな死んでるよ」

毒ガスの霧が少し晴れてくれる、絶望的な光景が目に入ってきた。

目の前に映る橋は命を繋ぐくもの糸だったはず。

その糸に縋り付いてきたものに容赦なく浴びせられた毒ガス。

どれも苦しみながらも、その場から逃げ出すこともできずに一塊となつて死んで行つたのだろう。

「ヒテ、とうあえずおまえを信じて良かつたよ。

ハセガワとイワキ…あいつらのことは忘れよう」

黙つたまま橋を見つめるおれの肩にアキオが手を掛けた。

「…ああ」

おれはアキオに内心を語られぬよう下を向いた。

『125・077・275／130・000・000』

『参加者1950118名』

周りの人の話によると、橋を渡つて本州へ辿り着いた人も原因不明だが次々と倒れて亡くなっているという。

おそらくそれぞれの橋を渡る際に何らかの毒物が仕掛けられていたのだろう。

故郷の四国を捨て、真っ先に逃げ出したものは死に、とじまつたものが生き延びた。

「アキオ、マジナ!!。おれらの選択は正しかったみたいだよ」

「まあな、あのまま橋渡つてたら死んでたもんな」

「いや、そのことじゃない。今始まつたこのゲームのことだよ。ゲームクリアの条件はなんだっけ?」

おれは下を向いたまま、顔がにやけるのを我慢しながらアキオに聞いた。

「ゲームクリアの条件って、ウッド・ベルが言つてた、『ハ恰恰ヶ所逆回り』のこと?」

「そう、それだよ。まずはゲーム参加メンバーに選抜された。これで第一関門は突破した。

で、この第一関門を突破したやつは今どこにいるのか?

大きく分けて二つのグループに分けられるだろう。

まずは、ウッド・ベルの警告を無視し、四国に残つたもの。

もう一つは四国を出ようと三つの橋に向かつたが間に合わなかつたため、運よく生き残つたもの。

前者は各自自宅付近にいるだらう。そして後者はそれぞれが向かつた橋の近くにいるだらう。

「この中で正しいスタート地点ここにあるのは……」

「あつ、おれらだーおれらだよー四国お遍路八十八ヶ所目はたしか
こいつのまうだよ。なあそういうだろ?」

「そうハ十八ヶ所目は香川県さぬき市にある大窪寺。

三つの橋の位置で見ると、瀬戸大橋と鳴門大橋がこの大窪寺に近く
なる。

3分の2の確率だが、今治を選んでなくてよかつたよ。

ゲーム参加人数が195万ってなってたけど、実質すぐに大窪寺に
動ける人間、広くみても今香川県にいるもののみ正式な参加メンバ
ーになるんだろうな

「なんか今日のヒゲなんか違うね…」

ふとつぶやいたマツナミの声が聞こえた。

確かにいつもおれと違つのは自分でもわかっている。

だが、抑え切れない程の鼓動が全て自分の力へと変わっているような気がした。

「さて、大窪寺に向かうか」

4月10日 新潟 米問屋事務所

8：00

今日も朝から『ウッズ・ベル』のニュースばかりだ。

寒い冬がやっと去りつかとこゝろ中、身も心も温まるよつな話題はな
いものか。

会社は売上、売上。

テレビをつければ『ウッズ・ベル』、『ウッズ・ベル』。

『ウッズ・ベル』が登場し、渋谷だけならまだしも、四国が閉鎖さ
れてしまった関係で会社の売上はつなぎ登りだ。

上司の機嫌もいい。

ただ、休みもなく働かされる現場の身にもなつてもらいたい。

所詮、会社の売上が上がつても現場の給料には反映されないのだから。

今日も一時間仮眠をとつただけ。

日本がこんな状況でも仕事だけは待ってはくれない。

「今日も部長に怒られに行くか

気合いを入れて米を保管している倉庫へと向かつた。

「今日もこれ全部運ぶのか…これだけの量をこの時間で運べってか

「ケイスケはまだいいほうだろ。おれはこれだよ

同僚のスズキが山積みの米にもたれかかって言つた。

「みんなびびつて食料のまとめ買い。せっかくまとめ買いしても『ウッド・ベル』が現れて毒ガスマかれたらい意味ないのにねえ」

スズキはそう言つが、おれも実は四国の件があつた次の日にスーパーでカップ麺やら缶詰やらをまとめ買いしていた。

ブー

ブー

「ん、また緊急速報か

四国でのことがあつてから、何かあると携帯に緊急速報が流れるよ

うになつた。

「そういえば今朝のニュースでやつてたけど、あの日に四国から出た人昨日までみんな死んだらしいね。

ん？大窪寺が全焼…同時に大窪寺に辺り着けなかつたと思われる人達が次々と死亡…だつてよ」

「あれから5日経つのにまだ政府は四国に入れないんだろ？なんかよくわからないバリアのせいで」

「翌日に助けに向かつた自衛隊が上陸できずに全滅だもんな。おとといは政府の包囲網を抜けて四国に入ろうとしたやつが遺体になつて本州に流れ着いたつて話だしね」

今四国は完全に封鎖されている。

入ろうにも入れないからだ。

四国内での現在の状況は、今『四国編に参加している』メンバーからの携帯での情報のみしかない。

「まあ、それよりはまだ運搬船の荷物を運ぶことにならぬ

4月15日 新潟 ケイスケトラック

8：18

『121・988・226／130・000・000』

あれから10日が経つた。

相変わらずカウンターは下がり続けているが、仕事は忙しい。

今日は一睡もしていない。

朝から米をトラックに運び込み、またいつもルートを走っている。

もつ少しで最初の配達先に着く頃だ。

ため息まじりに携帯を閉じようとすると、砂嵐が現れ、文字が浮かび上がった。

『ノウカノミナサマ、

オハヨウゴザイマス。

キハ、ジュクシマシタ。

ニホンハ、コメニ、ササエラレテ、キマシタ。

イマカラ、ソノコメニ、ホロボサレルノハ、アナタタチデス。

クワレルマエニ、クラエルカ。

…デハ…』

カタツ、カタカタ、カタ

『コメソウドウ』

カタ

『

米
騷
動

』

『米』という文字を見たおれは悪寒が走った。

普段見慣れた、日常扱っている『米』という文字を『ウッド・ベル』が使つたことで、身近なところに何かが起こるのでは、という想いがした。

「機は熟したつて…」

と、考える間もなく、配達先に着いた。

「まずは田先の仕事終わらせねえとな」

この配達先は四国の件があるまでは田中に運んでいたが、あれ以降納品量が異様に増えたため、オープン前の朝に納品させてもらつていた。

「すいませ～ん」

搬入口の電気が付き、中で物音がするが鍵を開けてもらえない。

とりあえず荷物を先に降ろしておいつとおれはトランクに戻った。

ガサガサ、ガサ、

ガサガサガサ、ガサ、ガサガサ

「ん？荷台の中から？なんだ？」

荷台の扉に手をかける。

ブー

ブー

緊急速報…？

ハツとしたが、おれの扉を開ける手はもう止められなかった。

黒い塊が開いた扉から一斉に噴き出してきた。

顔面、腹、脚と体全身に襲い掛かる。

半開きになっていた口にその物体が飛び込んできた。

「ゲ、ゲホッ」

吐き出そうとするが、黒い塊の圧力があまりに激しく、身体にまとわり付いていたため、逆に飲み込んでしまった。

トライック内の黒い塊は一時はおれの身体を飲み込んだが、気が付くとおれを中心に四方八方に飛び散つて行つた。

喉に奇妙な感覚を覚えながら、おれはその場にへたりこんだ。

「……なんだつたんだ……あれ……」

ブー

ブー

携帯の緊急速報がなり続けているのにやつと氣付き、携帯の画面を慌てて開いた。

『8・22 ウッド・ベルによる犯行予告と同時に米から大量の謎の虫が発生。この虫が人を襲い、各地で死亡者が出ている』

『8・30 現在手元にある米は容器に入れ密封すること。スーパー他、米を扱っているお店は店を閉め鍵をかけ避難すること』

ブー
ブー

続けざまに緊急速報が入る。

『 8・33 』の虫は新潟県産の米のみから発生。 5kg | 袋分で
人一人を襲い、食べ尽くした後、その場で死骸となる

トラックの荷台を見ると、限界まで積んでいた米の姿はなく、新潟
県産こしひかり100%とかかれたビニールの袋だけが残っていた。

ふと納品先の店内が気になつた。

軒先の電気は朝にも関わらずついているが店内は薄暗い。

「おえっ」

近付いて見ると、店内は例の虫が飛び回り、薄暗い雰囲気をかもし出していた。

店の自動ドアにへばりついているものを見ると、なんとも不気味な容姿が判明した。

「キツツコオロギを吐してまで割つたよつたみたこともなつ生き物だ。」

大きさは5㌢ほど。

あの小さな米粒からビリ生まれたのか？

「うげつ、おれこんなもん飲み込んだのか…」

店内の奥の方を見ると理科室にあるよつた骸骨が寝転んでおり、周囲には虫の死骸が転がっている。

「おれもあのままだつたら、いつなつてたのか…そういうえば、スズキは…」

スズキに電話をすると無事だった。

スズキのトラックの荷台にはまだ大量の虫が詰まつたままであり、そんな状態なので、途中でトラックを動かせなくなつているとのことだつた。

そんなに遠い所ではなかつたのでおれは空のトラックでスズキを迎えに行つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0983z/>

日本国民参加型ゲーム

2011年12月21日20時54分発行